

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01083

研究課題名（和文）馬具生産・流通構造解明を通じた日本古墳時代・朝鮮三国時代の馬匹生産体制の復元

研究課題名（英文）Reconstruction of the horse breeding system in the Kofun Period in Japan and the Three Kingdoms Period in Korea through analysis of the production and distribution structures of horse harnesses

研究代表者

諫早 直人（ISAHAYA, NAOTO）

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：80599423

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は考古学的手法を基軸に、日本古墳時代・朝鮮三国時代の馬匹生産体制、具体的には馬匹の生産・飼育の場である牧の景観を復元することを目的とした。まず、両地域を中心とする当該期の馬具を徹底的に観察した上で、東アジア規模での比較検討を通じて、馬具の生産・流通構造を明らかにし、馬具から馬匹生産構造にアプローチしていくための基盤を整えた。さらには動物考古学や文献史学など他分野で個別に進められてきた研究成果を総合し、体系的かつ一貫性のある馬匹生産像を構築するために、研究会や遺跡・遺物の検討会を開催し、馬匹の生産・飼育の場である「牧」の景観について復元的検討をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

馬具や馬骨などの遺物によって古墳時代に馬が渡来したことは定説となっているが、馬をどこでどのように飼っていたのかについては、これまでほとんどわかっていなかった。日本列島最古の牧として注目されてきた大阪府部屋北遺跡の発掘調査成果を再検討し、周辺の遺跡を含めて様々な角度から検討をおこなうことで、実態の明らかでなかった日本列島初期の牧景観の復元を試みた点に、本研究の最大の学術的意義がある。またその成果を中国や朝鮮半島などの馬匹生産とも比較した報告書『牧の景観考古学 古墳時代初期馬匹生産とその周辺』は考古学だけでなく、歴史学や畜産学など周辺分野にも裨益する内容を含んでおり、高い社会的意義を有している。

研究成果の概要（英文）：Using archaeological methods, this study aimed to reconstruct the horse breeding system of the Kofun Period in Japan and the Three Kingdoms Period in Korea, specifically the pastoral landscape where horses were bred and raised. First, we thoroughly observed harnesses from the Kofun and Three Kingdoms periods, and compared them on an East Asian scale to identify the breeding and distribution structure of harnesses. This lay the groundwork for understanding the horse breeding structure from the harnesses. Furthermore, to systematically create a consistent reconstruction of the horse breeding system, study groups and meetings were held to examine archaeological sites and artifacts and synthesize the results of independent research from diverse fields, such as zooarchaeology and documentary history. Additionally, a restorative study of the landscape of the pasture where horses were bred and raised was conducted, which is summarized in the report.

研究分野：東北アジア考古学

キーワード：馬 馬具 生産体制 日本古墳時代 朝鮮三国時代 東北アジア 古墳時代 三国時代

1. 研究開始当初の背景

かつては「騎馬民族」による征服活動によって説明されたこともあった日本列島と朝鮮半島における騎馬の風習の受容、定着をめぐる議論が、出土馬具に対する東アジア規模での国際的かつ精緻な比較研究の蓄積と、出土ウマ遺存体に対する動物考古学からのアプローチ、具体的には安定同位体比分析による産地推定法の急速な進展によって近年、飛躍的な展開をみせている。しかしながら肝心の馬匹生産、すなわち日朝両地域における牧の景観や馬匹の生産・飼養の技術移転の実態についてはほとんど明らかとなっていない。日朝両地域における馬具の生産・流通構造を検討するとともに、隣接分野において進められてきた研究成果と統合し、体系的かつ一貫性のある馬匹生産像を構築することができれば、これまで一般論として論じられるに留まってきた古代国家形成に馬の果たした史的意義を、実証的かつ具体的に論ずることができるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、出土馬具に対する考古学的検討を軸に据えつつも、あらゆる馬関連考古資料や文献史料に対する研究成果を統合することで、古代東北アジア、具体的には日本列島古墳時代と、それに直接的な影響を与えたことが予想される朝鮮半島三国時代の馬匹生産体制を復元し、比較検討することを目的に据えている。古墳時代の馬匹生産論は、出土馬具や馬歯骨、馬を飼育した牧と推定される遺跡の発掘調査など限られた資料をもとに進められ、それらを日本列島全体に敷衍する議論は低調であった。朝鮮三国時代については、馬関連考古資料の中でも馬具の研究に著しく偏っており、馬匹生産を議論するための糸口すらつかめていないというのが現状である。個別的手がかりは確保されつつあるが、本研究ではそれらを単に寄せ集めるのではなく、研究代表者がこれまで東アジア規模で比較を進めてきた馬具研究をベースとして、隣接分野で進められてきた様々な研究成果と統合することで、体系的かつ一貫した馬匹生産論の叙述を試みた。

3. 研究の方法

本研究は次の三つの方法を併用し、得られた成果を相互にフィードバックしながら進めた。(1)については基本的には研究代表者が単独でおこない、(2)・(3)については研究会や遺跡・遺物の検討会などを適宜実施し、研究協力者と共同でおこなった。

(1) 日朝両地域における馬具の生産・流通構造の復元

申請者がこれまで主として研究対象としてきた日本古墳時代・朝鮮三国時代とそれに併行する時期の馬具は東アジア各地で出土事例が確認され、それらの製作技術を比較することで当時の馬具の生産・流通について実証的な議論が可能である。本研究では各地から出土した馬具の実地調査にもとづいて、東アジア規模での馬具の生産・流通構造の復元を目指すと同時に、「馬具」を、それを装着した「馬」の動きを復元するための資料としていくための方法論の整備をおこなった。

(2) 日本列島古墳時代初期牧景観、馬匹生産の復元的研究

馬(ウマ遺存体)や馬具といったモノの研究から、古墳時代に馬がどのように飼われ、どのように利用されたのかについては、手がかりが得られるようになったものの、どのような場所で飼われていたのか、その具体的な「場」についての手がかりはまだほとんどない。そのような問題を解決する「場」として、大阪府下、生駒山地西麓の中でも河内湖北岸(四條畷市周辺)に注目した。この地に注目した理由は大きく三つある。一つ目は、葦屋北遺跡に代表される大小の発掘調査によって、この地域は古墳時代中・後期の馬関連考古資料や渡来系考古資料の集中する特異な地域であることが明らかとなっていること。二つ目は、『日本書紀』などの文献史料にみえるいわゆる「河内馬飼」関連記事と、馬関連考古資料の集中から周辺に古墳時代牧の存在が確実視できること。三つ目は、河内湖を介して海とつながっており、朝鮮半島からの技術移転を議論する上でこれ以上ない地であること。

これらからこの地域における馬の飼育・生産の具体相が明らかとなれば、日本列島各地との比較はもちろん、よくわからないことが多い朝鮮半島や中国などユーラシア大陸の牧や馬の飼育・生産のあり方についても、何らかの手がかりが得られることが期待された。なお、朝鮮半島三国時代についても日本列島古墳時代と同じレベルでの分析を当初おこなう予定であったが、コロナ禍により実地調査を果たせなかったため、以下の(3)で予察的に扱うに留まらざるを得なかった。

(3) 東アジア初期牧景観、馬匹生産の比較研究

河内湖北岸、葦屋北遺跡周辺に対する再検討作業を通じて復元された古墳時代初期牧の景観、馬匹生産のあり方を中国、朝鮮半島や日本列島各地と比較し、相対化を図るとともに、今後の課題のあぶり出しを試みた。とりわけ日本列島に馬をもたらした朝鮮半島については考古資料、文献史料にもとづいて現時点での初期牧研究の到達点を確認することに努めた。

4. 研究成果

本研究で明らかとなったことは次の二点に要約される。

(1) 古墳時代の馬・馬具の生産流通モデルの復元

古墳時代及びそれに併行する時期の東北アジアでは、その開始や終焉に顕著な時期差があるものの、金銀を用いた装飾馬具が製作され、有力者の古墳に副葬された。これらの製作遺跡が見つかったことはないが、製作技術をふまえた型式学的研究の積み重ねにより、4~5世紀代の東北アジア各地において、王権ごとに特色ある装飾馬具生産が次々と展開していったことが明らかとなっている（諫早直人 2012『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』）。王権膝下の工房で製作され、各地の有力古墳に副葬された装飾馬具は実際の使用に耐えるものであり、馬に装着することを前提に製作され、おそらくは馬に装着された状態で王権のもとから各地へ下賜された可能性が高い。

一方、古墳時代のウマ遺存体に対する安定同位体比分析によって、古代（平安時代）の文献史料から推測されてきた地方（馬匹生産地）から中央（王権中枢）への馬匹移動（貢納）という現象が、古墳時代中期にまで遡ることが明らかとなっており、今回分析を実施した大阪府部屋北遺跡出土ウマ遺存体についても出生地の多様性が認められた。このようなウマ遺存体に対する安定同位体比分析の結果と、装飾馬具の型式学的研究の知見を総合すると、地方の馬匹生産地で生まれた馬が中央に一度集積、調教された後、装飾馬具を装着した状態で、馬匹生産地を含む地方に再分配される、というあり方を復元することが可能である（図1）。これが当時の日本列島の少なくともエリート層が騎乗する飾馬の生産・流通の一端を示しているとみてよければ、日本列島に先駆けて同様の装飾馬具生産体制を構築していた東北アジアの諸地域にも、同じような馬匹生産・供給体制が存在した可能性が高い。

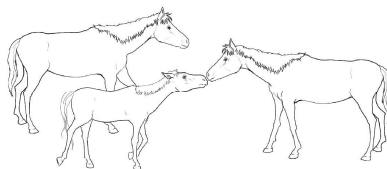
(2) 古墳時代初期牧景観の復元

これまでまったくその実態が明らかでなかった古墳時代初期牧の景観を復元するために、(2)で述べた様々な状況証拠によって、日本列島初期の牧が周辺に展開したことが明らかであった大阪府部屋北遺跡およびその周辺における既知の考古学的成果の再検討作業を研究協力者と進めた。まず、部屋北遺跡で検出された膨大な遺構について、重複関係や出土遺物にもとづいて帰属時期を明らかにし、その変遷の中に馬関連考古資料を位置づけた（図2）。とりわけ馬の繋ぎ場、馬小屋の可能性のある遺構、馬小屋に付設する馬の肥溜め遺構、飼葉置き場などの馬関連遺構について候補となりうる遺構の抽出を試みた。また、部屋北遺跡から出土した馬具、ウマ遺存体、製塩土器、鍛冶関連考古資料、土師器などから、馬匹生産はもちろんそれに付随して展開したとみられる様々な手工業生産について検討をおこなった。あわせて、周辺の発掘調査成果をもとに、当時の河内湖北岸の地形復元や、同時期の周辺遺跡の展開を考慮した放牧地の検討、牧廢絶後の馬飼集團の動向についての検討などをおこなった。これらを通じて、河内湖と生駒山地に挟まれたこのエリアに古墳時代中期前半、すなわち5世紀前半に遡る日本列島最古の牧の一つが展開したことを明らかにすることができた。

これらの検討結果を、日本列島初期牧の源流である中国、朝鮮や、同時期の日本列島の諸地域と比較し、河内湖北岸に展開した古墳時代初期牧の特質を浮き彫りにするとともに、それらの地域における牧の展開についても議論を及ぼした。その特質を一言でまとめると、朝鮮半島からの家畜馬やそれを飼育する技術者（馬飼集團）の大規模な移動を伴う技術移転を実現した倭王権によって、水運によるアクセス性（ウマの海上輸送の容易さ）と、大量に必要となる放牧地の確保という二つの面から、計画的に設置された牧ということになる。以上のような本科研で得られた成果の詳細については、諫早直人編『牧の景観考古学 古墳時代初期馬匹生産とその周辺』（2023年、京都府立大学文学部）として一書にまとめ、公表をおこなっている。

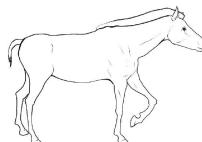
現象1 移動（地方→中央）

根拠：ウマ遺存体に対する安定同位体比分析。伊那谷、榛名山東方の発掘調査成果など
解釈：各地の馬匹生産地で産まれた馬の一部（おそらく牡馬）が倭王権中枢へ移動（貢納?）



現象2 集積（中央）

根拠：ウマ遺存体に対する安定同位体比分析、部屋北遺跡周辺の発掘調査成果など
解釈：倭王権中枢の牧に集積。飼育、調教



現象3 再移動（中央→地方）

根拠：古墳副葬装飾馬具の型式学的研究、分布論など
解釈：倭王権中枢の工房で製作された装飾馬具を装着した馬が馬匹生産地を含む消費地へ再移動（下賜?）

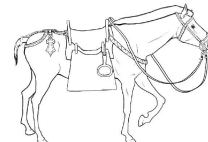


図1 古墳時代の飾馬の生産・流通モデル

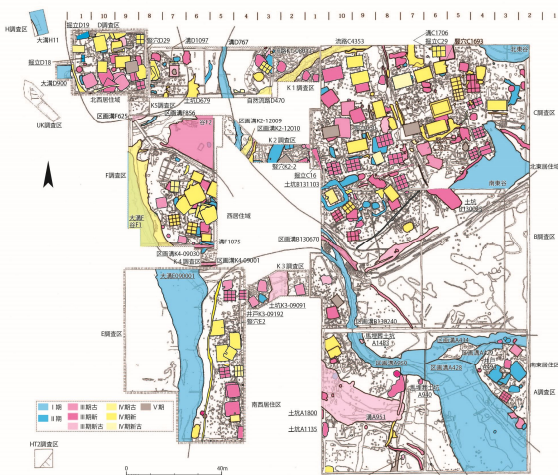


図2 部屋北遺跡の遺構変遷

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計25件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 諫早直人（張嘉欣・石艶艶・尤悦訳、菊地大樹校）	4. 巻 11
2. 論文標題 馬文化在東亞的東伝進程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北方民族考古	6. 最初と最後の頁 338-351
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 植月学・覚張隆史・諫早直人・丸山真史・青柳泰介	4. 巻 38
2. 論文標題 「新羅馬」の炭素・酸素同位体分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 動物考古学	6. 最初と最後の頁 61-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 諫早直人・馬淵一輝	4. 巻 7
2. 論文標題 京田辺市トツカ古墳出土遺物の再検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報	6. 最初と最後の頁 47-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 諫早直人・田口裕貴・菱田哲郎	4. 巻 7
2. 論文標題 京田辺市堀切古墳群の再検討（3）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報	6. 最初と最後の頁 83-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人・大江克己・金宇大・降幡順子・山口欧志・吉澤悟	4. 巻 21
2. 論文標題 群馬県白山古墳出土品の研究2	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿園雑集：奈良国立博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 21-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 217
2. 論文標題 宋山江流域における馬匹生産の受容と展開	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 153-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 731
2. 論文標題 馬の流通，馬による交通	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 15-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 150
2. 論文標題 古墳時代・古代：馬具・馬	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 67-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人・G.エレゲゼン・L.イシツェレン	4. 巻 101(1)
2. 論文標題 モンゴルの匈奴墓出土馬具 轡を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 考古学雑誌	6. 最初と最後の頁 75-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 日本列島出土初期高句麗系馬具について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 古代高麗郡の建郡と東アジア	6. 最初と最後の頁 141-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 東アジアにおける馬文化の東伝と加耶	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 加耶古墳群 (韓国語)	6. 最初と最後の頁 193-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 和順懐徳3号墳出土馬具の製作年代	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 和順 千德里 懐徳3号墳 (韓国語)	6. 最初と最後の頁 173-186
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 騎馬民族論の行方	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 考古学講義	6. 最初と最後の頁 291-314
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 草原の馬具 東方へ与えた影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユーラシアの大草原を掘る 草原考古学への道標	6. 最初と最後の頁 194-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 4～5世紀日本と加耶の馬具	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 加耶騎馬人物形土器を解剖する (韓国語)	6. 最初と最後の頁 277-333
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 馬・馬具からみた百舌鳥・古市古墳群	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 海を渡った交流の証し 遺物からみた五世紀の倭と朝鮮半島	6. 最初と最後の頁 25-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 日本出土馬胄と馬甲 研究動向と出土事例紹介	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 馬 甲胄を着る (韓国語)	6. 最初と最後の頁 158-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 綿貫観音山古墳出土馬具の系譜と製作地	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 綿貫観音山古墳のすべて	6. 最初と最後の頁 198-207
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 日韓における馬胄・馬甲研究の現状と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 柳本照男さん古稀記念論集 忘年之交の考古学	6. 最初と最後の頁 151-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 倭の馬具と加耶	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 馬に乗った加耶 加耶馬具特別展	6. 最初と最後の頁 274-289
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 馬匹生産地の形成と交通路	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 馬と古代社会	6. 最初と最後の頁 35-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 日本のなかの牧畜文化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 和食文化学入門	6. 最初と最後の頁 123-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 曹操高陵出土馬具が語るもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 技と慧眼 塚本敏夫さん還暦記念論集	6. 最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 大和の木製鞍と古墳時代の馬匹利用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国家形成期の近畿地方における馬と塩の関係に関する基礎的研究	6. 最初と最後の頁 103-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 諫早直人	4. 巻 -
2. 論文標題 古墳出土馬具と仏教工芸 竹原市横大道1号墳出土馬具の紹介を兼ねて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 聖地霊場の成立についての分野横断的研究	6. 最初と最後の頁 25-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計16件(うち招待講演 12件/うち国際学会 6件)

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 古墳時代の牧 百舌鳥・古市古墳群と馬生産のはじまり
3. 学会等名 令和4年度世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」の魅力を楽しむ市民講座(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 魏晋の馬具と東北アジア
3. 学会等名 黒川古文化研究所・西宮市・西宮市教育委員会共催第68回夏季講座「魏晋南北朝 それぞれの生活と文化」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 ISAHAYA Naoto
2. 発表標題 The Landscape of Early Horse Breeding in Japan
3. 学会等名 WAC-9(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 馬具の暦年代論と古墳時代中期の対外交渉
3. 学会等名 中国四国前方後円墳研究会 第25回研究集会「中期古墳研究の現状と課題～新編年で読み解く地域の画期と社会変動～」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 曹操高陵出土馬具の提起する問題
3. 学会等名 国際学術シンポジウム 「インフラからみた古代東アジア都市の展開」(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 鏡の出現 騎馬東伝の原動力
3. 学会等名 人文研アカデミー2021 シンポジウム「考古学からみた古代東アジアの馬利用」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 日向における馬生産のはじまりと国宝馬具の系譜
3. 学会等名 国際シンポジウム 国宝馬具とその時代(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 4-5世紀 日本と加耶の馬具
3. 学会等名 第25回加耶史国際学術会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 馬匹生産地の形成と交通路
3. 学会等名 古代交通研究会第20回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 朝鮮半島における馬の普及と利用
3. 学会等名 群馬県立歴史博物館開館40周年記念シンポジウム「考古学からみた東アジアの馬文化」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 馬文化の東伝と加耶
3. 学会等名 加耶古墳群 世界遺産 搭載 研究 forum（韓国）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 ガウランドが伝えた「遺産」 京都府鹿谷古墳群の記録と出土資料
3. 学会等名 第63回明治大学博物館公開講座（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 古代東アジアの装飾馬具生産 現状と課題
3. 学会等名 金工品からみた古代東アジア世界の交流（韓国）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 馬・馬具からみた百舌鳥・古市古墳群
3. 学会等名 第9回百舌鳥古墳群講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 騎馬文化からみた古代の福津
3. 学会等名 福津市複合文化センターカメラアステージ歴史資料館 平成30年度歴史講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 諫早直人
2. 発表標題 大英博物館ゴーランド・コレクションからみた鹿谷古墳
3. 学会等名 大英博物館ゴーランド・コレクション調査プロジェクト(亀岡編)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 諫早直人・溝口泰久(編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都府立大学文学部考古学研究室	5. 総ページ数 32
3. 書名 地域資源としての湯舟坂2号墳 出土品研究の最前線 《発表資料集》	

1. 著者名 諫早直人・向井佑介(編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 303
3. 書名 馬・車馬・騎馬の考古学 東方ユーラシアの馬文化	

1. 著者名 国立金海博物館(諫早直人訳・監修)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 国立金海博物館	5. 総ページ数 288
3. 書名 馬に乗った加耶 加耶馬具特別展	

1. 著者名 諫早直人（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 京都府立大学文学部	5. 総ページ数 379
3. 書名 牧の景観考古学 古墳時代初期馬匹生産とその周辺	

1. 著者名 諫早直人（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都府立大学考古学研究室	5. 総ページ数 28
3. 書名 地域資源としての湯舟坂 2号墳 発表資料集	

1. 著者名 李熙濬（諫早直人訳・吉井秀夫解説）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 284
3. 書名 新羅考古学研究	

1. 著者名 諫早直人訳・監修	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国立金海博物館	5. 総ページ数 311
3. 書名 国立金海博物館図録 日本語版	

1. 著者名 右島和夫（監修）、青柳泰介・諫早直人・菊地大樹・中野咲・深澤敦仁・丸山真史（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 331
3. 書名 馬の考古学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	青柳 泰介 (AOYAGI Taisuke)		
研究協力者	李 炫ジョン (LEE Hyunjung)		
研究協力者	井上 智博 (INOUE Tomohiro)		
研究協力者	植月 学 (UETSUKI Manabu)		
研究協力者	寛張 隆史 (GAKUHARI Takashi)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	菊地 大樹 (KIKUCHI Hiroki) (00612433)		
研究協力者	佐野 喜美 (SANO Yoshimi)		
研究協力者	實盛 良彦 (JITSUMORI Yoshihiko)		
研究協力者	新尺 雅弘 (SHINJAKU Masahiro)		
研究協力者	千賀 久 (CHIGA Hisashi)		
研究協力者	塚本 浩司 (TSUKAMOTO Hiroshi)		
研究協力者	中野 咲 (NAKANO Saki)		
研究協力者	野島 稔 (NOJIMA Minoru)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	早川 和子 (HAYAKAWA Kazuko)		
研究協力者	菱田 哲郎 (HISHIDA Tetsuo)		
研究協力者	松田 篤 (MATSUDA Atsushi)		
研究協力者	真鍋 成史 (MANABE Seiji)		
研究協力者	丸山 真史 (MARUYAMA Masashi)		
研究協力者	右島 和夫 (MIGISHIMA Kazuo)		
研究協力者	宮崎 泰史 (MIYAZAKI Taiji)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------